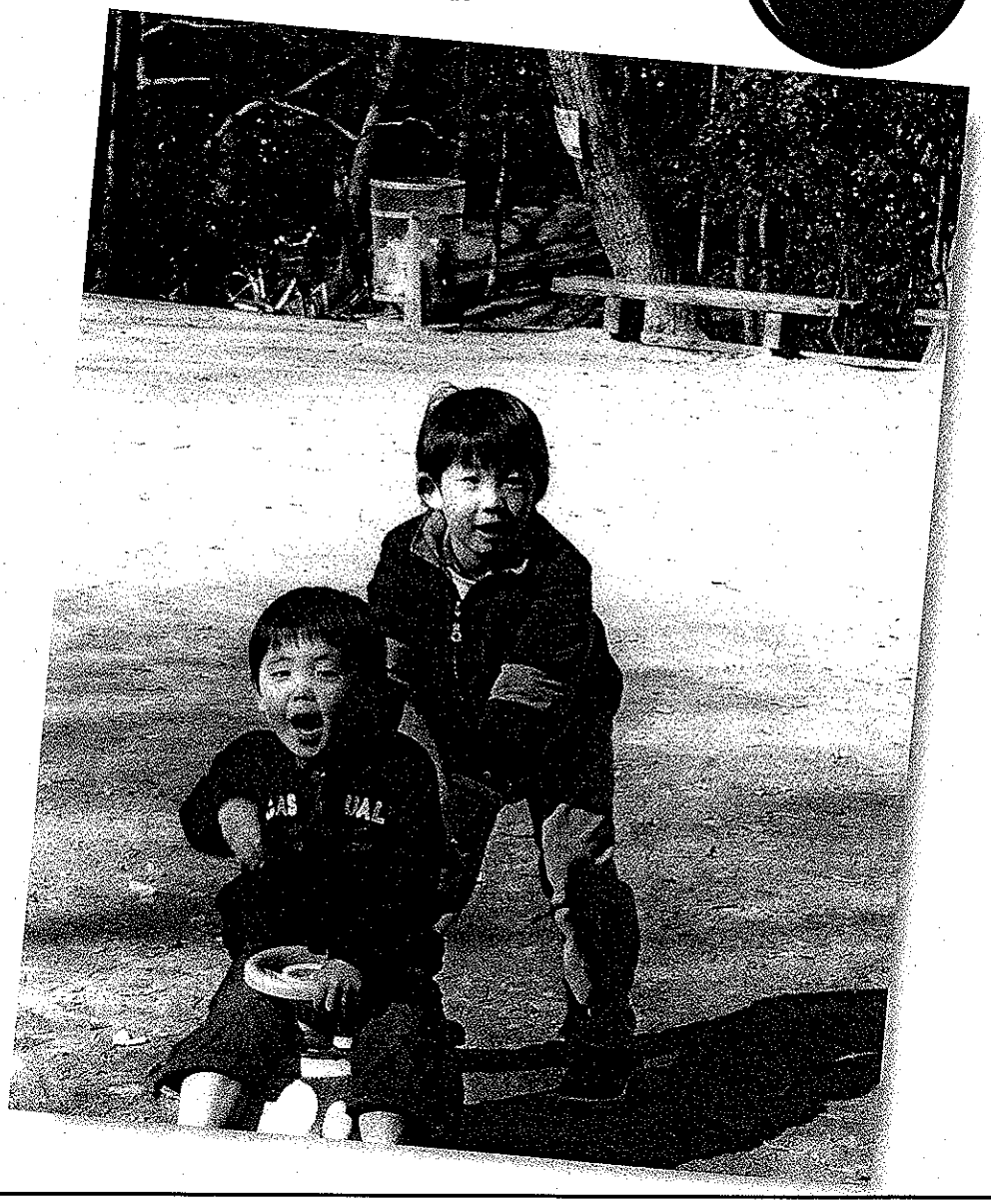
●人権教育推進会議情報誌●

はじけるこころ

vol.4

人権の宝島　六中発……1
ゆうからきいて！に応えて……3
ゆうからきいて！……5
こんなことあるよ……7
こんなことあるよ 突撃インタビュー……8
ともだち100まんにん かわのひでただ……9
ドキドキわくわく人権教育レポート……11
人権教育基本方針解説……14
げんげののぺぇじ……15



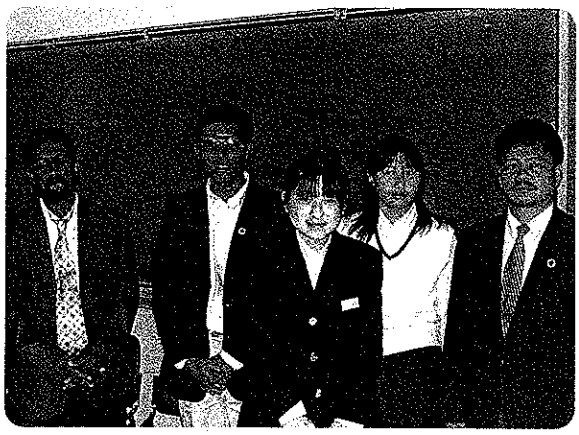
みのおから世界へ！　人権文化の花束を！

・ストーリー

生き抜くために。
第六中学校
であろう人生の荒波に焦点をあてて――

を通して子どもたちが、誕生、労働、結婚、育児、介護、老後というように人生を歩んでいく形で進行します。人生そのものを総合的な学習と考え、子どもたち一人ひとりに生き方を迫ろうとするものです。

各学年のテーマは、1年「人との出会い」2年「はたらくということ」3年「生きるとは」です。



●地域・保護者と協働で

人権講演会　保護者や地域の方とともに「地域から咲かせよう。『人権の花』――気づくことからはじめよう。――」と題して講演会を行いました。岸本美智子さん（本校 保護者）と桂正孝さん（宝塚造形美術大学）を講師として招き、「障害をもつ子の親として、いかに、子どもの自己決定をささえていくのか」、さらには、「子どもの人権を守ることとは、まずは、子どもの『居場所』をつくっていくことである。」という指摘には、一人ひとりの普段の子どもたちとの寄り添い方を思い浮かべ、考えさせられました。

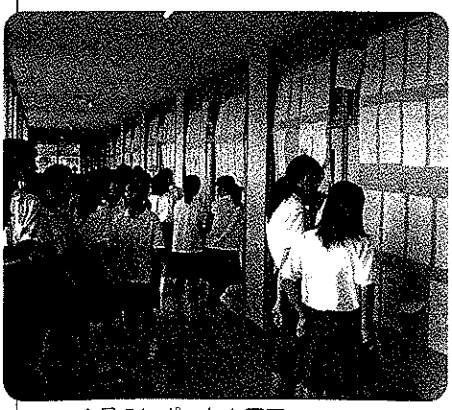
岸本美智子さん
と桂正孝さん

ひがし幼稚園と合同運動会を開きました。

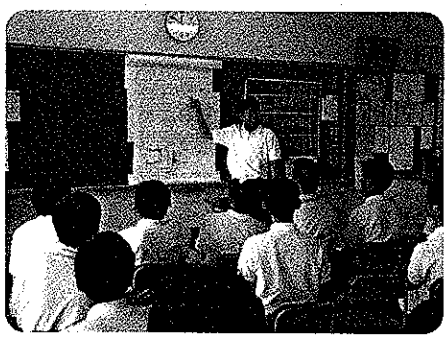
幼稚園児たちとともに開会式をひらき、いっしょに競技もしました。幼稚園の保護者の方も中学校のグランドで、親子競技を楽しまれました。生徒たちに「やさしさ」や「思いやりの心」が育ちつつあります。

●3年／「生きるとは」

1学期には、生徒それぞれが興味をもった、環境や人権の問題を取り上げて、レポートにまとめました。クラス内での発表のあと一斉に全員のレポートを展示し、交流を深めました。

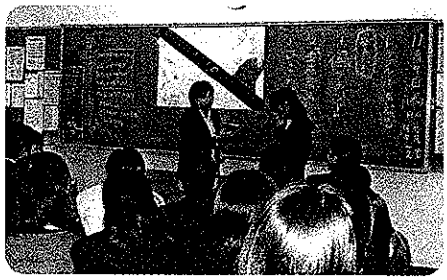


全員のレポートを展示



多くの生徒の関心を集めたレポートは、ポスターセッションにおいて発表され、クラスの枠をこえて、熱心な質疑応答がおこなわれました。

2学期には、誰もが遭遇する可能性のある消費生活におけるトラブルについて学習しました。被害に会わないための啓発を促す寸劇、紙芝居、ポスター等を製作し、発表会をもちました。



偽ブランドを取り上げたオリジナル劇の発表風景

マイ・ライフ

21世紀を

箕面市立

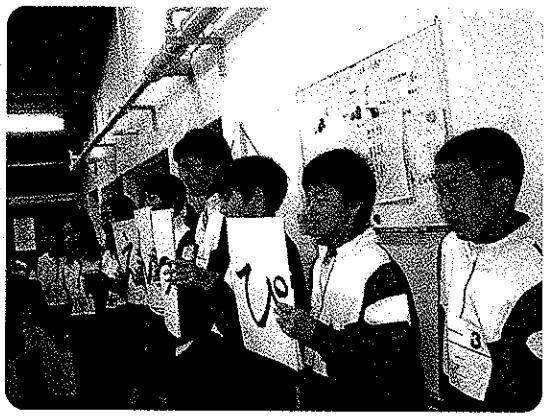
―生と死のはざまで、やがて遭遇する

六中では、「夢や目標をもって自ら学ぶ生徒」「人権を尊重し節度をわきまえ感動する心をもった生徒」「生命を尊重し、すすんで心と体をきたえる生徒」をめざし、人権教育をすすめています。

その中心となるのが、総合的な学習『マイ・ライフ・ストーリー』です。これは、メインテーマを「生と死」におき、3年間

●1年／福祉体験

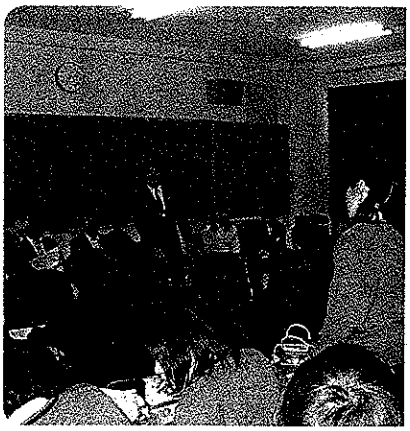
箕面市内の9つの施設を訪問し、合唱、クイズ、漫才、手品などを披露したり、お年寄りと風船バレーなどをして一緒にすごしました。



●1年／国際理解

バングラデシュ、パキスタン、ミャンマー、スリランカ、マレーシア、パラオ、ボリビア、ジャマイカという8カ国の方々に学校に来ていただき、お話をうかがいました。

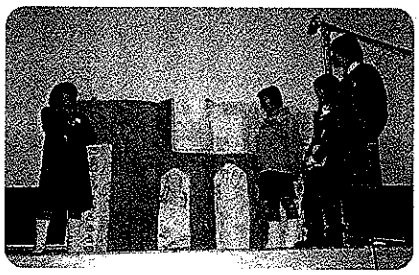
どの国の方も、自分の国に誇りをもっていらっしゃるのにびっくりしました。



●2年／体験

「いらっしゃいませー！」元気な声と明るい笑顔でお客様をお出迎え。

地域のお店で2日間働かせていただきました。学校では体験できないことばかりで、とても勉強になりました。



【発表】職場体験学習で得たことを、みんなの前で発表しました。発表形式も様々で「劇」「制作ビデオ」「パソコンを使ってのプレゼンテーション」など各クラス個性的で、退屈しない発表会でした。

【合気道】他国の文化を知る前に、自国の伝統文化を知ろう。普段はなかなか体験できない、「武道」「書道」「茶華道」「伝統料理」「囲碁将棋」など自分の興味のある講座で日本の心に触れることができました。

ゆうからきいて！に応えて

「はじけるこころ」第2号の「ゆうからきいて！トッキの会」に対して、3人の方からおたよりをいただきました。

「ゆうからきいて！トッキの会」を読んで

寺元耕二（箕面二中教諭）

箕面市では、様々な国からやって来る子どもたちが幼稚園、小・中学校に多数在籍しているという事情もあり、国際理解教育が盛んである。色々な国・地域について調べたり、留学生を招くなどして、異文化に触れ、多文化共生をめざすとりくみが展開されている。その対象も欧米地域に偏らず、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ等も視野に入れられている。とりわけ隣国については、昨年サッカーのワールドカップが日韓共同で開催されたことを契機として、多様な文化交流が実施され、情報量も飛躍的に増えたようだ。各校園での実践と相俟って、隣国に対する理解、親近感は格段に深まったと言えよう。

しかしその一方で、在日韓国・朝鮮人に対する私たちの考え方、接し方はどれほど改まっただろうか。昨年9月以降の拉致関連報道は、朝鮮民主主義人民共和国を絶対悪とする主張に満ちている。それを受けて、民族学校に通う子どもたちに理不尽な暴言、暴力があびせられたのは、これで何度目になるだろう。かつての強制連行、強制労働（及びその未処理）と今回の拉致が、同列に論じられるべきでもなければ、相殺される類でないのは言うまでもない。しかし、余りにも歴史的認識を欠いた一方的な言論と、それに導かれ"北朝鮮憎し"一色に染まってしまう日本人を、在日はどのような思いで見つめているのだろうか。そして、そんな日本人の姿も、戦後60年近いこの国の教育の"成果"ではないのか。トッキの会のオモニたちも「先生は歴史的な背景など何一つ学ばないで……」と指摘している。外国、特に隣国を知ることは、歴史的経緯を背負わされた在日の子どもたちと、横並び志向の強い日本人の子どもたちが、互いを認め合い、真に共生をめざせるような働きかけが求められている。

昨年の夏、ソウルの文具店で見つけた、ハングルの「よくできました」スタンプをノート点検時に使うと、生徒たちは「これ、何て読むん？どんな意味？」と訊く。そんなある日、一人の生徒が「先生、韓国好きなん？」と声をかけてきた。在日だとは聞いていたが、それまでそのことに触れていなかったので、「来た！」と思いながら韓国旅行の印象やハングル学習について少し話してみた。「ふーん？」という顔つきで聞いていたが、「私も韓国やねん。韓国の名前もある、こんなん。けど大人になったら帰化するかもしれへん」等と語ってくれた。それ以上に話を深められてはいないのだが、打ち明け口調だったのが棘のようにひっかかっている。なぜ当たり前の話題にできないのか。在日であるとの認識に隠すべきだという意識を押しつけてきたのはいったい誰か。また、指導要録の名前の記載に当たって（おそらく本人も知らない）「可能な限り母国語の発音で」フリガナを記入するという点で相談を受けたこともある。その生徒が知らされていないとすれば、その背景も"打ち明け"と同様であろう。

自己の出身を隠せという圧力――日本で生まれ生活している在日の人権は日々蔑ろにされている。保護者はその存在を「受け止め」、「継続的な取り組みを」と願いつつ、私たちが「避けて通ろうとしている」、「問題から逃げている」と感じている。在日の子どもたちと向き合うために「実態把握を怠ることなく」（人権教育基本方針、第2章2の2）行うことがきちんとなされ、教職員に共有されているだろうか。誰が在日か明らかにされない現状が放置されてよい筈がない。オモニたちは「うちが在日やいうこと、先生らは当然知ってはるんでしょ？」と怪訝そうに訪ねる。学校園でのとりくみの大前提として、丁寧な実態把握（及び教職員への周知）と、歴史や背景についての認識を深める研修とで、オモニたちの期待に少しでも応えたいと思う。

ゆうからきいて！を聞かせてもらって

谷川　京（東小教諭）

在日韓国朝鮮人教育が置き去りにされていると聞くことがありますが、在日韓国朝鮮人教育を進めるためには、一人ひとりが人権問題に関心が持て、主体的になれる所を切り口に進めていくことが、遠回りのように見えますが、近道であると考えています。現在ある人権問題を解決していくために、ひと事でなく自分のこととして人権を考えることができる子どもたちを、育てていきたいと思っています。上田さんがおっしゃるように、知識として学ぶ人権はなかなか根づきません。そのときは、分かった気になっていますが、なかなか自分のこととして考えられない子どもが多い現状を打ち砕きたいと思うのです。

学校では、人権教育を系統的に進めていくことを確認し、取り組んでいますが、その時の教職員の姿勢が問われていると思います。その姿勢に、子どもたちは大きく影響されることはいうまでもありません。先ず、私たち教職員の人権意識を見直しながら、日々子どもたちと考え合っていく、その積み重ねを

大切にしていきたいと思います。あらゆる道を通って子どもたちと山を登りますが、道に迷わないように、人権教育を広くとらえたがために、本質が見えなくなることのないように、人権感覚が鈍らないように、心したいと思うことです。

在日韓国朝鮮人教育については、文さんのおっしゃる「先生からの逆差別、特別扱い」、また、金（吉）さんのおっしゃる「特別扱いは望まないが、少し気にして欲しい」ということ、左さんのおっしゃる「何も聞かないのが平等だと思っている先生、勉強不足の先生」、金（明）さん、高さんのおっしゃる「分かろうとせず避けて通ろうとする」こと、この皆さんのご意見は、保護者の皆さんと教職員との信頼できる関係ができていないことが、一番の原因だと受け止めました。教職員側でよく聞かれることは、「どう切り出していいか分からない。」ということです。お互いに遠慮しあっているところからは何も生まれません。本音で話し合える関係を作っていきたいと思います。お互いが本音で話し合えた時、きっと、何かが、動き出すと思います。動き出さなければおかしいと思います。私たちは、こんな取り組みをこんな目標を持ってしていきたいということを伝え、保護者の皆さんとしっかり話し込むことが大切だと思っています。私たちも分からないことはどんどん聞いていきたいと思います。どうぞ、保護者の皆さんもゆうからきいて！と担任の先生に思いを伝えてください。しつこく伝えてください。

在日韓国朝鮮人教育が置き去りにされていると思われがちですが、理解を深めるために、あらゆる場面を通して、人権教育をしていきたいと考えています。子どもたちとも、本音で向かい合っていきたいと思います。人の気持ちを想像し人を思いやる気持ちとか、自分も相手も大切にする気持ちとか、違いを認め合えることとか、人として、当たり前のことを、子どもたちと、あらゆる場面で学びあい考え合っていきたいと思っています。

人権の当事者の自覚を誰もが持てた時、在日韓国朝鮮人教育も進むと考えています。

国際化社会にあって求められること

真鍋あけみ（西小教諭）

誰しもが、差別や偏見から解き放された社会に生きたいと願っています。これからのますますの国際化社会にあって求められるのは、自らを差別や偏見の目で縛らないで共に生きていこうとする姿勢ではないかと思います。そういう意味から、在日朝鮮人教育も国際理解教育に含まれていると考えています。それは、今まで在日朝鮮人教育で築かれてきたものを薄めるものでも、ないがしろにするものでもなく、新しい時代に即応したものであると考えています。

私は、3年間マレーシア・クアラルンプール日本人学校に勤めました。そこでの体験を通して、感じたことを述べたいと思います。

それはマレーシアの田舎でのホームステイでの経験です。ご存じのようにマレーシアはイスラム教の国です。マレー文化を色濃く残している田舎での生活は、日本式の生活様式とは大きく異なります。マレーの伝統的な家は高床式で、熱帯の果樹が茂る庭には鶏が放し飼いにされています。1日5回のお祈りはもとより、言葉も通じなければ、左手厳禁、右手の指で床に敷かれたテーブルクロスを囲んでの食事や風呂代わりに水浴びをすることなど全くかって違います。子どもたちは初めはおっかなびっくりながらも、一生懸命に自分たちを迎え入れてくれているステイ先の家族の心にふれて、片言のマレー語と英単語と身振り手振りを駆使して交流を深めることができました。ホームステイを終えた子どもたちは、異口同音にまた来たい。日本と違うところはいっぱいあるけど、マレーシアはマレーシアでいいところがいっぱいある、と言います。文化の差異に優劣をつけるのではなくて、それぞれの気候や風土、歴史による文化の違いを違いとして受け止められる感性を育てることが大切だと思います。そのために、私は以下の点を大事にしたいと考えています。

①オープン・マインド

自分の物差しは堅持しながら、かつ異文化を試してみよう、おもしろそうだと感じ受け入れられるオープンさ。子どもたちは、なんとか自分のことや日本のことを伝えようとし、また、ステイ先の家族の暮らしを試してみようとしていました。お湯が出ない……、床で食べるなんて……、クーラーがない……、「だから『きたない』『遅れている』」などと日本の（自分の）暮らしや文化を絶対化するのではなく、相対的にとらえられるオープンマインドが大切だと思います。言葉は2の次、3の次。

②伝えたいものをしっかりもつこと

言葉は話せる方が、便利なことは言うまでもありません。相手を理解し、自分の考えを言うには、国際共通語としての英語が必要です。しかし、自分の中に伝えたいものがあるかどうかがより重要だと強く思います。自国の文化理解や自分のバックボーン、何を大事に生きているかなどをもつことだと思います。

③健康であること

異文化を楽しみ、失敗を恐れずに果敢に挑戦するには、やる気の源である「健康」は、やはり大切です。

ゆっくりきいて!

箕面市立幼稚園・小学校・中学校では、モンゴル、韓国、ロシア、インドネシアなどさまざまな国から来た子どもたちが学んでいます。平成14年度には、13人の子どもたちが通訳・日本語指導の支援を受け学習しています。それぞれが、言葉や文化の違いにとまどったり驚いたりしながら、いろいろなことにチャレンジし、生き生きと学校生活を送っています。今回は中学校3年生のヴィクトリアさん(グァテマラ)と小学校4年生の矢野銘新さん(中国)のお二人にお話していただきました。

エルヴィラ・ヴィクトリア・カサソラ・アルダナ

(Elvira Victoria Casasola Aldana)さん(四中・3年生)に日本での学校生活などについてお話をうかがいました。

――いつ日本に来られましたか?

2001年の2月のはじめ、妹(当時小学1年生)と来ました。年齢にあわせて中学1年の学年に入りました。お母さんは、大学での勉強のために私たちよりも1年早く日本にきていました。

――何か困ったことはありましたか?

来たときは、日本語が全然できなかったんです。初めて学校に行った日、お母さんが学校まで来てくれましたが、教室まではついてきてくれませんでした。とても緊張しました。日本語が話せないので英語で自己紹介をしました。

日本語はできなかったけど、ジェスチャーで何とかコミュニケーションはとれました。1年生の時は週に2回だけ通訳の先生が来てくれましたが、それだけだったので、その先生がいないときはわからないことを聞ける人がいませんでした。

体育や美術は言葉がわからなくても内容がわかるのでよかったのですが、ほかの授業はわからないので、教室にいるのがとてもつらかったです。特にグァテマラではいつも90点以上とっていた英語のテストが、こっちで38点しかとれなかったときはとてもショックで泣いてしまいました。勉強がつまらなくなり、1・2年生の時は全然勉強しませんでした。

3年生の時からは進学のことを考えて、数学と理科の時間には英語を話せる先生がずっと横についてくれました。はじめに来たときからそうしてくれていたらもう少し早く日本語が理解できたし、もっと安心できたと思います。

今では日本語もほとんどわかるようになりました。でも社会の授業は難しくてよくわからないので、その時間は別の教室で数学や理科のわからないところを教わっています。3年生になってからは一生懸命勉強しました。

――それはどうしてですか?

グァテマラに帰ったときに、授業の内容がわからなくて教室にいるのがつまらなくなるのが嫌だから、みんなについていけるようにしたいと思って勉強しています。お母さんにも励まされました。グァテマラでは新学年が1月から始まります。私は今年の3月のおわりにグァテマラに帰るのでみんなと比べたら3ヶ月遅れて学校に行くことになってしまいます。1月から10月まで学校があって11月と12月が休みになります。

――日本に来てよかったことは?

クラブ活動ができたことです。吹奏楽部でサクソホーンをふいていました。グァテマラの学校にはクラブ活動はありませんが、音楽専門の塾のようなものはあるので、できるならそこに入って音楽を続けたいと思っています。グァテマラの学校での音楽の授業は歴史の勉強で、楽器を買うお金がないので、ベートーベンやモーツァルトについてなど音楽の歴史を勉強しました。

2年生の時の体育大会では、マヤ文明のシンボルをデザインしたTシャツをみんなで着てラテンアメリカ

ヴィクトリアさんのお母さん、リリアナ エスエラ アルダナ フロレス(Liliana Estela Aldana Flores)

さんからもお話をお聞きしました。

私は、JICAの留学制度を活用し、日本の教育システムを3年間勉強するために来日しました。日本の教育で重要なことは、参観日や懇談会が定期的に実施され、保護者が学校にきて積極的に教育に参加するということです。グァテマラでは、成績が悪いなど何か問題があって教師のほうから呼び出しがないかぎり、保護者が学校に行くことはありません。また、政権が安定していないため教育のシステムがよく変更され、教師の待遇も悪く、教師のストライキが長期にわたり実施されます。さらに、公立学校では1学級60人で、子どもたちの教育環境はとてもよいとはいえません。

日本の学校では外国人の子どもたちが安心して学べるように通訳の制度があります。これと同じように、スペイン語が公用語であるグァテマラでも、マヤ言語しか話せない子どもたちも安心して学べる環境をつくりたいと考えています。マヤ言語の取り組みは、マヤ言語専門の大学が創立されるなど、数年前からなされているのですが、教える人材が不足しており、なかなかうまくいっていません。

ヴィクトリアの通訳については、ていねいに、そして親切に対応していただきましたが、生活言語にとどまらず各教科の専門的な言葉についても対応していただければなおよかったと思います。

日本の文化は閉鎖的だといわれますが、学校でもはじめは外国人ということでものめずらしく見られたかもしれませんが、思春期のこの時期にまったく言葉のわからない日本にやってきて、しかしながら、時間がかかったけれどもたくさんの友だちができたことは、ヴィクトリアにとってもまわりの友だちにとってもいい経験ができたのではないかと思います。先生方やその他の皆さんの精神的なサポートには大変感謝しています。

のダンスを踊りました。とてもうれしかった。
友だちは、はじめはなかなかできなかったけど、今ではたくさんの友だちができました。
それと、2年生の時、弁論大会にでたことです。原稿はスペイン語で書き、それを苦労して日本語に直しました。まだ、日本語があまり分からなかったので全部覚えるのも大変でした。でもいい経験ができたと思っています。

――今後やりたいことは？

これからもいろんな言語をどんどん覚えたい。せっかく日本語を覚えたので、グァテマラで暮らすいとこたちに教えてあげたいです。
そしてグァテマラの学校をもっとよくしたい。グァテマラでは学校に行かないで朝から働いている子どもたちがたくさんいます。字が読めない人もたくさんいます。それに6・3・3制は日本と同じなのですが、小学校でも落第があって、11歳で小学校1年という人もいます。けれどもそこまでして学校に行き続ける子どもはほとんどなく、学校に行くのを途中であきらめてしまい、そして働きだします。日本のような給食もなく、学校は昼で終わります。お母さんも教育について勉強していますが、お母さんもわたしもグァテマラの教育をもっとよくしたい、すべての子どもが学校に行けるようにしたいと思っています。お母さんも子どもを通して日本というものを学んだのがとても貴重だったといっています。

●

矢野銘新（やのみんしん）さん（西南小・4年生）とお母さんの**矢野雪子**（やのせつこ）さんにお話をいうかがいました。

――いつ日本に来られましたか？

平成14年の2月に日本にきた。学校は16日から。ちょうど1年になるかな。お母さんは5年前から日本にきていた。学年は年齢のとおり3年生の学級に入った。
はじめは日本語が全くしゃべれないし、わからないから学校生活がどうなるか心配やった。通い始めて最初の2ヶ月は午前中の2時間に通訳の先生がついてくれた。授業中だけでは足らないと思ったから、毎週土曜日にも家にきてもらって日本語の勉強をした。お母さんが教室に入って横についたのは最初の1日だけだった。学校でのルールを早く覚えて、学校に慣れようと思った。学校のルールは2～3ヶ月でだいたいわかるようになった。今ではほとんどのことがわかる。

――困ったことやつらかったことはありますか？

学校にきた次の日にドッジボールをしたけど、やったこともなかったし、ルールもわからなかったからいやだった。でもあたらなかった。あんまり体育は好きじゃないな。マラソンも嫌だった。
あとは、まわりのみんながなにをいってるのかわからなかったこと。わからなくてくやしかった。数字はいっしょなのでなんとなくわかったけど、国語がつらかった。

――学校生活の違いは？

中国では教室で日本みたいにわいわいしない。授業中は教室は静か、風の音と鉛筆を落とした音だけ。静かなほうがいいな。友だち同士でふざけて遊んでいるのをみてケンカしてるんかと思った。
中国の先生はとってもきびしい。日本は子どもを甘やかしすぎる。先生も優しい。中国だったら夏でも扇風機はないし、冬でも暖房するのは遅い。
夏休みが長すぎる。長すぎて暇だったから塾の夏期講習にいった。
学校に図書館があるのがいい。中国ではなかった。また、西南図書館が近くにあるのでよくいった。
中国ではなんでも、する人はどんどんするし、しない人は全然しない。運動会は体育が得意だったり、したい人だけが参加して後の人は見学するだけ。だからみんなが参加する日本の運動会はびっくり。団体演技で盆踊りと河内音頭をした。
給食にもびっくり。おいしい。中国では家に帰って食べてた。それも迎えにきてもらって送ってもらっていた。中国では一人で通学しない。
日本は空気がいい。大連は植木も少なく土の部分が多く土埃がすごかった。

――今困ってることは？

体育がちょっと苦手。バスケは好きだけど。サッカーや野球はボールが当たってけがするし、砂がいっぱいついて汚い。土はあまり好きじゃない。水は好き。中国では水泳はしたことなかったけど、水泳教室に通ってずいぶん泳げるようになった。背泳とクロールができる。
本読みのテストが心配。日本人の日本語の発音が難しい。同じ言葉でも前後のつながりでイントネーションが変わるからよくわからないときがある。本読みの順番が回ってくると緊張する。一番に当たるのは嫌。あとのほうがいい。
言葉はほとんどわかるから授業や教科書で困ることはほとんどなくなった。全然心配していない。でも授業中はしずかにしてほしい！

――家ではどう？

中国語を話す時間が減った。お母さんと二人の時だけしか話さない。日本人がいる前ではお母さんとも中国語では話さない。他の人には何をいってるかわからないからふつうにしゃべってるだけでも悪口をいってるように思われる。笑いながらしゃべってると馬鹿にしているみたいに思われる。それがいや。だから、お母さんともほとんど日本語でしゃべる。でもどうしてもわからないときは中国語でしゃべるけど。二つの言葉を話すことができてとっても便利。日本語って急いでるときひらがなで済ますことができるから便利だと思う。
遊ぶより勉強するのが好き。週3日塾、週1日水泳、とっても忙しい。土曜日に通訳の先生にきてもらって、今は作文を教えてもらってる。

――将来は？

先生になりたい。きびし～い先生。小学校の先生になりたいな。静かな授業をしたい。

――うれしかったこと？

先生が親切にしてくれたこと。中国ではこんなに親切じゃない。転校しても一人でがんばれってかんじ。日本では本当にいろんな人が心配してくれた。中国では校長先生や教頭先生はとってもこわい。厳しい。あんまり話さない。日本の先生は優しい。安心した。泣いたり困ったりしたのは、最初の一週間くらいだけだった。

美しい人生を

聖母被昇天学院高等学校　2年　三井田　愛矢

「心の輪を広げる体験作文」最優秀賞　高校・一般部門

駅前で、車いす生活者が輪になって、何かを訴えていた。

中には、首がすわらず、しどろもどろに話す人もいる。

「お願いします！お願いします！。」

彼らが、頭を下げながら、懇願するように必死にビラを差し出しても、受け取る人はほとんどいない。

健常者たちは、彼らを無視するかのように、足早に通りすぎていく。まるで別世界の人間であるかのように……。

その時のことだ。

小さな女の子の手をひいた若い母親が、その娘（こ）に言った。

「ねえ、○○ちゃん、悪いことをしたらねえ、あんなふうになるんよ。」

はっきり聞こえたその言葉に、開いた口がふさがらなかった。

「許せない！」

ふと、従弟のイクオ君の姿が頭をよぎる。

実は、彼も、車いす生活を余儀なくされている障害者の一人である。たしかに身体にはハンディがある。足の筋肉も萎え、枯れ枝のように細い。言語にも障害があってよく聞き取れない。「あ～、う～っ」、と苦しそうに話す。長野に住んでいるため、めったに会うことはないが、歳が一つ違いと言うこともあって、親近感を覚える。

「彼は、絶対に悪い人間ではない！悪いことをしたから、障害者になったのではない！それが、彼の個性なのだ！車いすに乗っていることは、恥ずかしいことではない！」

たとえ普通にしゃべることができなくても、たとえ車いすに乗っていようとも、かけがえのない尊い命を授かっている、一人の人間なのだ。彼には、だれにも代えることのできない彼独自のよさがある。障害があり、自由に振る舞えないことから、ひょっとして、健常者が陥るであろう悪に染まる機会だって、少ないかもしれないのだ。彼は生まれたばかりの純粋なままの心の持ち主なのだ。

「悪いことをしたら、障害者になる。」

幼な子にとって、親の言葉は、絶対だ。

『障害者＝悪者（罪人）』、あの幼な子が大人になったとき、自分の娘に再び同じことを伝えるのではないかと心配でならない。

今、こんなえらそうなことを言っているが、実は、私自身、かつては障害者とかかわるのが怖かった。なぜなら、「障害者は一人では何もできない、弱い人間である」と見下しているところがあったからだ。

しかし、この体験を通して、障害者をもっと理解しよう、彼らのために何ができるかをもっと考えよう、という気持ちに変わっていった。

そんな矢先、この夏、「ビーナス一日看護師体験」に参加する機会を得た。人気番組のテレビドラマ「ナースのお仕事」を思い浮かべながら、ルンルン気分でのスタートだったが、現実は、まるで想像をくつがえす出来事つづきであった。

「学生さん？名前、なんて読むの？」

（ちゃんと名札をつけているのに、どうしてこんなこと聞くんだろう？変だなあ。）

「み・い・だ、って読むんだよ。」

（なるほど、そうか。周りの看護師はみな、ひらがなで名前を書いているのに、私一人が漢字で書いていたのだった。）

初めから失敗してしまって、ショック。でも子どもたちは、くったくなく笑顔で接してくれた。彼らを助けてあげたい！当初は、そんな一心で接しようとしたけれど、やがてその気持ちが間違っていることを知らされる。

看護師の方々を観察していると、何もかも手助けをするわけではなかった。いや、むしろなかなか手を貸さないのだ。子どもたちができる限り自分でできるように、自立を促す方法をとっていた。一見冷たいようだが、それが本当の教育だと教えられた気がした。

ともすれば、親切であることが愛であると錯覚することがある。今回の体験は、まるで逆だった。じっと見守る。気がかりであっても、よほどの危険さえなければ、放置しておく。そのままやらせる。最後にそっと手を差し伸べる。見事だった。一方で、細かいところにも神経が行き届いていた。

「骨盤が弱いから、床に座らせる時には、充分に気をつけなきゃいけないんだよ。」

障害者には、私たちがふだん、普通にできることができない現実がある。分かっているつもりだったが、それが予想以上だったため、とてもびっくりした。女の子の歯を磨く体験にも驚いた。人の歯を磨くなんて、初めての体験だった。恐る恐るの体験だった。

たった一日の体験だったが、たくさんのことを学んだ。多くの障害者とかかわった。その中での一番の確信は、一人も悪い人がいなかった、みんなみんないい人ばっかりだった、ということだ。心が純粋で美しかった。看護師をめざし、生涯、障害者とかかわっていこうという気持ちがますます強まった。障害者とかかわればかかわるほど、私自身が純粋になれる。美しい人生が送れる。そんな気持ちにさせられた、ふたつの体験に感謝している。

「心の輪を広げる体験作文」＝障害者に対する理解と認識を深めるため、内閣府、大阪府、大阪市の共催で募集が行われている。小学生部門、中学生部門、高校・一般部門があり、平成14年には994点の応募があった。

2月5日(水)、午後4時から聖母被昇天学院中学高等学校の校長室で、『心の輪を広げる体験作文』で、最優秀賞を受賞された高校2年生の三井田愛矢さんと、指導にあたられた栗田校長先生にお話をうかがいました。

――応募のきっかけは？

三井田さん どちらかというと、文章を書くのは苦手なのですが、常日ごろから、何か書きたい、高校生のうちに挑戦してみたい、と思っていました。そんな時、いろんなコンクールの募集一覧が教室に掲示してあったのです。その中で、「これだ！」とピンときたのがあって、すぐに校長先生のところに相談しに行きました。

書いたのは夏休みです。家で書いたものを、部活（テニス）の合間に、校長先生にみていただきました。自分では、けっこうカッコよく書けていたつもりだったのですが、いろんなところというか、全体的なことを指摘され、こてんぱんで、とてもへこんでしまいました。けれども校長先生から、基本的なことから教えていただいて、いろんなことが分かってきました。書き直しも6回し、何度も添削していただきました。その結果、最優秀賞と聞いた時は、びっくりしました。しんどかったけど、やってよかったと思いました。表彰式（クレオ大阪）では、100人ほどの聴衆の前で、朗読発表できたことも、大きな自信につながりました。

栗田校長先生 文章を書く上での基本的な技術を教えるより前に、何よりも大切なことは、本人がどんな体験をし、そこで何を感じ、それをどう受け止めたのかを聞き出すことでした。それから、文章を読んで理解しにくい部分や、何となく真実が伝わって来ない部分を。じっくり面接形式で話し合いました。時には、自宅にも電話をして確かめ合ったこともありましたねえ。何度も書き直し、あきらめずによく頑張りましたよ。文章がだんだんよくなっていくのが、本人なりにうれしかったのでしょう。こうなれば、しめたものです。どんどん意欲も湧いてくるし、もっとうまく書くぞ、という気持ちになるものです。これは、文章を書くことだけでなく、何事もくり返してやってみることが成功の秘訣であるということでしょう。がんばろうと努力する生徒は、最大限、応援しています。

――この募集がピッタリだ、と思ったわけは？

三井田さん 以前、病院で看護師体験をさせていただいたことがあるので、ピピッときたんです。その時は、3年生が1人、2年生4人が参加しました。私は小児科配属でしたが、今まで何とも思っていなかったことにも、いろんな意味があることに気づかされました。そして、看護師の魅力に取りつかれた気がしました。

――学校のカリキュラムの一部としての、体験学習だったの？

三井田さん いや、そうではなくて、あくまでも一般募集として、自主的に参加しました。前から、一度は体験したかったことだったんで…。その体験が作文を書いて応募してみようというきっかけにつながったんです。

栗田校長先生 子どもたちが成長するためには、学校のカリキュラム以外の部分が大きな役割を果たすことが多分にあります。たとえば本校で取り組んでいる国際交流事業とか、釜が崎での体験学習やいろんなボランティア活動などを通して、生徒たちはいろんなことを発見していくようです。昨年の「箕面まつり」では、のべ120人（全校生365人）が、ボランティアとして、参加活動しました。授業以外のいろいろな体験、学校全体にゆきわたっている潜在的な雰囲気を通して、生徒たちは他者に関心を寄せたり、自分に何ができるか、何をしなければならないか、といったことを考える目が養えるのでしょう。

本校は、学力だけで生徒を決して評価していません。いろんな考えるきっかけを与え、心をゆさぶることが大切だと常々考え、心がけているつもりです。生徒一人ひとりは、みんなすばらしい宝物をもっています。潜在能力もすごい。そこをどのようにして見つけるかが、教師に一番問われることでしょう。生徒たちが、新たな自分に目覚めるような、何をやりたいのか見つけられるような動機づけをしていきたい。その一つに、作文指導がある、ということです。一人ひとりの生徒の特色を模索しながら、これからも、どんどん生徒を応援していきます。

突撃インタビュー

2月22日(土)朝、西小路児童公園の清掃活動をされていた西小路北こども会などの3年生から6年生の子どもたちにインタビューしました。突然のインタビューにびっくりしたかな？またどこかにインタビュー隊が現れるかも……そのときはよろしく！

――こども会の活動で一番楽しいのは？

・しあわせの村に行った日帰りバス旅行、楽しかった。

――楽しいことは？ホッとするのはどんなとき？

・勉強は楽しくない。

・ゲームの時、いつも一人でする。

・休みの日はゲームをする、親とはしない。

・学校図書館で本を読んでいるとき。

・学校では今はバスケットがはやっている。女子は鉄棒やうんていがはやり。

・友だちといるときが楽しい。

・学校も楽しい。

――つらいなあ、いやだなあって思うことはどんなこと？

・勉強

・先生にもちょっと不満、先生が違っていたら勉強も楽しかったかも……。

・習い事がいや、公文とバイオリンをしてるけど、特にバイオリンがいや。なんでかというと、遊ぶ時間が短くなるから。

・けんかの時いややった。

・殴ったりしたけど後で仲直りした。

――人権ってなに？

・「……」

――人権って聞いたことは？

・「……」

・聞いたことはあるけど分からない。

インタビュアー：人権教育推進会議委員
福島全子さん、松野ひろみさん

ともだち100まんにん

かわのひでただ

空にポッカリ、ポッカリと、白い雲のかたまりが、ひとつ、ふたつ・・の広島市・。ホッペをスルリとすべっていく、そよ風からも春のにおいがフンワリ、フンワリ。

今日は、リョウくんの「こいびと」だったユキちゃん（小学校二年生）がなくなって、一年目のあつまりです。あつまったおどなや、こどもたちは、ユキちゃんの大スキだった小学校まで、思い出のページをめくりながら、あるきます。もちろん、リョウくんもみんなのまんなかで、人工呼吸器をしたがえ、ストレッチャー（ベット式車イス）にゆられています。

キツイ坂道を、エッチラオッチラ、みんなフウフウ。ユキちゃんも、いつもこんなだったねと、しょっぱい汗とはちがう、しょっぱいしずくのたまが、ホッペでころがります。

学校について、みんなが校庭でひと休みしていると、とつぜんリョウくんが、

「ほら、そこにユキちゃんがきているよ。」

と、まあるい目をパチクリ、パチクリさせました。みんなは、ビックリして、校庭のあっちこっちに、目の色をひろげます。おとなには見えないのに、なんにんかのユキちゃんのともだちが、

「ほんとだね。ユキちゃんもきとるねぇ。」

と、うれしそうに声をあげ、ゆっくりと笑いあいました。

夕方、あつまりもおわり、

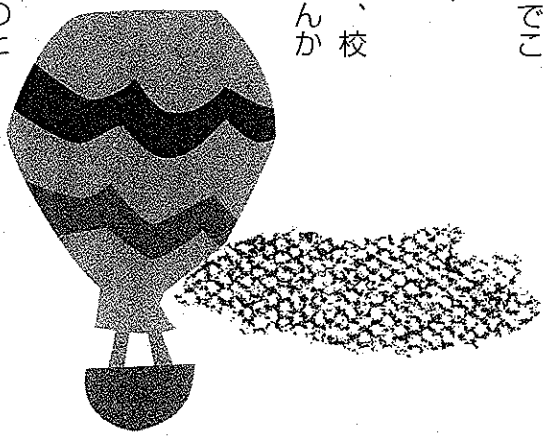
「また来年もくるからね。」

と、やくそくして、リョウくんは、大阪に帰る自動車にのりこみました。そのとき、リョウくんが、

「ユキちゃんを大阪につれて帰るよ。」

と、目をパチクリさせました。

「もう、ユキちゃんは、車にのってるもん。」

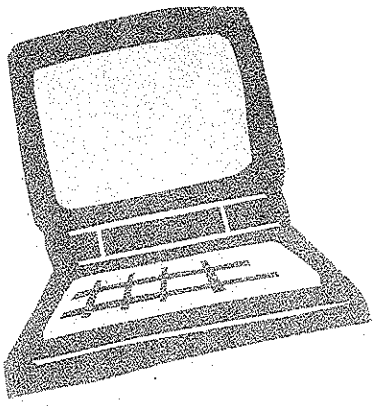


と、すまし顔です。
さあ大変。ユキちゃんのお母さんは、大あわて。
「大阪につれていっちゃいけん。みんなさびしくなっちゃうよ。それに、ユキちゃんのおたんじょう会ができなくなっちゃうじゃん。」
と、ほんとうに泣きだしそう。リョウくんのお母さんは、リョウくんのまあるい目をのぞきこんで、
「ウフフ・・・。」
と、ほほえみました。ああだ、こうだのあと、とうとうリョウくんは、ひとりで大阪に帰ったのでした。

リョウくんには、九州にも、東京にも、北海道にも、沖縄にも、日本のいろいろなところに、リョウくんやユキちゃんとおなじように人工呼吸器をつかってくらしているともだちがいます。アフリカにも、ヨーロッパにも、アジアにも、アメリカにも、世界のあの街、この街、海のあるところ、山のあるところ、ひとのいるところに、ともだちがいるのです。それからね、リョウくんは、コンピューターをつかって、手紙をつかって、自分のことを書いた「しんぶん」をつかって、あのひとたち、このひとたちとともだちになっています。もちろん、学校のともだち、近所のともだちもいるんだよ。リョウくんは、
「ともだち100まんにんダァ。」
と、とてもゆかいそうに、まんまる目をパチクリさせます。きっと、リョウくんは、世界中のひとたちをともだちにしてしまうんじゃないかなぁ。にんげんだけじゃあなくて、花も、動物も、風も、雲も、流れてとまらない川やみどりの山も、雪も海も、み～んなともだちにしちゃうんだ。

みんなではなしあうヒント

●ユキちゃんは、みんなのところにいたのかな。
●あなたには、なんにんのともだちがいますか。
●スキなひともともだち、キライなひともともだち。あなたは、どう思いますか。
●あなたは、ともだちにたすけられたことがありますか。ともだちをたすけたことがありますか。みんなで話あいましょう。



ドキドキわくわく人権教育レポート

止々呂美小学校で10月後半から12月初めにかけて取り組まれた「※ストーリームービー」についてのレポートです。5・6年生の5人の子どもたちと担任の山下先生・柴田先生が、自分とむきあい、自分の伝えたいことを表現しようと全力をつくしました。

止々呂美の自然

川西悠太（止々呂美小学校6年生）

ぼくは、止々呂美の自然が大好きです。止々呂美は山に囲まれているので、秋はとても紅葉がきれいです。特に、ぼくは、もみじの赤い色が好きです。

秋には止々呂美の特産物のくり、ゆずもあります。くりは10月、ゆずは11月ごろに収穫します。特産物は他にもびわ、さんしょ、すみ、しいたけがあります。ぼくはしいたけがきらいです。でも、びわは大好きです。

止々呂美には余野川という川が流れています。ぼくは余野川を見ていると気持ちが落ち着くし、川の水の流れる音も大好きです。

でもぼくが選ぶ止々呂美の「一番」は、魚のコイです。ある日、お父さんと、上の所の橋の近くで犬を売っているHさんの家の前の道を歩いていて、その時に初めて見ました。

「コイって、こんなに大きかったっけ」と思いました。そのコイは、マゴイで色は黒でした。道から見下ろしていて、もっと近くに行ってみたいなあと思いました。それも6ぴきぐらいいました。

お父さんに聞いてみると、何年も前からここにいて、洪水になっても深いので大丈夫だそうです。ぼくは一度でいいから間近で、そのコイたちを見てみたいです。

ストーリームービーの取り組み

山下景子（止々呂美小教諭）

夏休みもあと数日となったその日、私はとても緊張しながら、教育センターに向かった。ストーリームービーの担当者である、※プロシードの永留佐代子さんとの打ち合わせである。

「自分のことを3、4分のストーリーとして、表現するんですよ。」と、さりげなく言う永留さん。

「えっ、たったの3分」

「とにかく、私のストーリームービー見てください」と永留さんは、ノートパソコンをすっと取り出し、準備を始めた。

心地よいバックミュージック、映し出される青い海、青い空…思わず画面に引き込まれる。仕事で行った沖縄で出会ったおばあさんが大きく映し出される。都会の東京で生まれ育った永留さんは、そのおばあさんの生きざまに心惹かれたという。数年後、仕事で行った屋久島でのおつれ合いとの出会い、息子さんの誕生。沖縄のおばあさんのすがたと屋久島での生活が重なり、永留さんの心のありようが、音と映像とともに見えてくるようだった。

「これだ！」と私は心踊った。1学期に、「止々呂美を世界に広めたい」と子どもたちは言った。このストーリームービーに取り組んだら、単に「止々呂美」をまとめるのではなく、「自分にとっての止々呂美」を表現できるのではないかと、とてもうれしくなってきた。加えて、おばあさんの生きざまに心惹かれ「自分」を考えたという永留さんの生き方に感銘し、ぜひ、子どもたちに、永留さんと出会わせたいと思った。そして、私自身、この人といっしょに仕事がしたいと思ったのである。

この胸のときめきを、早く子どもたちに伝えたいと思いながら、帰路についた。

10月28日（月）

永留さんたちと子どもたちとの初顔合わせの日が来た。6年生2人、5年生3人だけでなく、担任2人もいっしょにムービーを作るのだ。屋久島の小学校の子がつくったムービーを見せてもらった。みんなイメージがわいてきたみたい。止々呂美や自分の「一番」（気に入っているもの、紹介したいもの、自慢できるもの、etc）を10個見つけてくるのが1か月間の宿題だ。

11月25日（月）

「え～?!　うそやろ！」　永留さんの「使えるのは1個だけ。9個は捨てる！」という言葉に、7人全員、絶句。見つけてきた「10個」すべてをムービーに織り

※ストーリームービー＝コンピュータ上で表現する画像・音楽・ナレーションで構成したストーリー
※プロシード＝ストーリームービーの取り組みを指導・サポートする会社

込めると思っていたのに…。

11月26日（火）

選んだ題材をもとに、作文を書き始めた。

11月28日（木）

今日は作文の発表だ。発表を聞いていると、一人ひとりの心の奥にあるやさしさみたいなものが見えてくる。

11月29日（金）

作文が終わった。みんな「つらい」とか「苦しい」とか言いながらも、本当に言いたい部分だけを残すように削ぎ落として書いた。

けど、悲愴感はなかった。苦しかったけど、心は、ワクワクしてた。それは、7人ともがこの取り組みの中で最後までもち続けていた感情のような気がする。そんな気持ちを味わわせるような体験を子どもたちにさせたことが今まであっただろうか。

今日からは、使う写真や絵をパソコンにとり込む作業。

12月4日（水）

ナレーションに合わせて、写真や絵をつないでいく。ここでの課題は「こだわる」こと。写真が作文にマッチしているか？　写真の現れ方はこれでいいか？ナレーションと写真の変わり目がうまく合っているか？…　自分が満足いくまで、こだわるのだ。

12月5日（木）

できた～！　ついに、完成した！　自分のムービーに涙を流す。もう一回、見る。また、涙。

12月6日（金）

ムービーの発表会。1～4年生の子どもたち、5・6年生のお母さん方、先生方を前に、5・6年生の子どもたちは、かつて見たことのないような緊張の面持ち。

12月19日（木）

子ども1人ずつに「ストーリームービーやって、何が一番よかったと思う？」と聞くと、YもRも「プロシードの人たちと出会えたこと」と言った。ものすごく、うれしかった。子どもたちは、プロシードの一人ひとりから、確実に何かを得た。私が8月に永留さんから得たように……

止々呂美小学校での授業は、「止々呂美のよさを伝えたい」という強い思いをもつ6年生の2人、表現することが大好きな5年生の3人が、「自分のお話ムービー」をつくりたいという動機を強くもっていたことが、成功の一番大きな要因であった。「やりたい」という気持ちこそ、何かを作るのには絶対に必要。やらされていても何も生みだせない。「あなたたちが監督だよ」「すべてに『こだわる』」という私たちの言葉をまっすぐに受け止め、作品づくりにまい進してくれた子どもたちの姿は、今も目にしっかりと焼き付いている。

この体験を通して、「自分の心と対話する」ことを体感してくれたらと思う。ものを作る面白さの体験もさることながら、苦しい場面でこそ「自らと対話」し、答えを自分で模索することが大事。自らの手で作るからこそできる体験と体感だ。子どもたちの中にそんな経験を残せただろうか。それが私たちへの評価である。「みんな、どうだった？」。（プロシード 永留佐代子）

いろいろ○○○○○この二週間

西林遼一郎（止々呂美小6年生）

（前略）11月25日がやってきた。（中略）考えてきた「十個」を発表した。みんなのを聞いたら、こういうのもあった、と思った。そしたら、永留さんが、「この中から、ベスト3を選んでください。」と言った。ぼくは（みんなも）、「えーーっ」と思った。「つなげて、いいですか？」と、ぼくか誰かが聞くと、「いいけど。」と言ってくれたので、ぼくらは、「十個」のを物語になりやすいように、つなげまくった。それは、みんな「十個」は捨てきれないからである。この日に「十個」のうちの「一個」だけの物語のムービーを作るということを知った。少し、苦しいというか、もったいない気持ちになった。

そして、そのベスト3を発表した。みんな、全員、「十個」のだいたいをつなげて3つにしていた。山下先生なんか、全てつなげていた。ぼくは、3位は友だちと家と身の回りの人を合体させて3位にした。2位は、段々畑・田畑と止々呂美の自然と、かいら虫を合体させた。1位は、人数が少ないことの良いことと悪いことと止々呂美のことと、小学校生活とゆずや虫を合体させて1位にした。「その中からベスト1を決めて。」と言われた。「ベスト3全部を合体させたらあかん？」と聞いたら、「あかん。」と言われた。ぼくは、決心して、1番の「人数が少ないことなど」のに決めた。そして、それについて、作文を書き始めた。ぼくは、あまり文章が浮かばなかった。それから毎日のように、ムービー作りが二～三時間

あった。

次の日、永留さんが、「止々呂美のことを書く悠太君と遼一郎君、こっち来て。相談があるから。」ぼくは、「こえ～」と思った。でも、その相談で止々呂美のことの内容がはっきりさせることができた。ぼくは、『止々呂美の人』を中心に書くことに決めた。改めて新しい紙に書いた。ぼくは、「やるぞ～」という気分になった。前に調べた人口密度を書くため、ノートを持ってきて、書いたりした。「これじゃ気にくわん。」と思い、つけたしたりしていたら、上條さんに、「きみ、作文好きでしょ！」と言われた。なぜかと聞くと、いろいろつけたしとかしてるからだそうだ。ぼくは、作文好きっていうほどではないけど、まあ好きだから、「さすが、プロ！」と思った。うれしかった。がんばって書いた。書いている時、Kはもうできてた。「うわー、はや～。」と思った。少しあせった。でも早いからいいということではない。でもぼくは、あせった。柴田先生も山下先生もぼくも、なかなか文章がまとまらなかった。ぼくと先生二人は、思ったことを、ば～～～～～と書いていった。ぼくは、ば～っと書いて、後でピックアップしたら、何とかなるやろと思った。そして、この日の授業が終わるころには先生たちとぼく以外は、作文が終わっていた。かなりあせった。でも、早けりゃいいっていうものじゃない、と分かりつつ、でもあせった。

そして、次の日。作文の発表の日だ。（中略）ぼくの作文はまとまっていないけど発表した。いろいろな意見が来た。「材料がおもしろい！」「思いが伝わってきた」「もう少し内容をしぼっては」「止々呂美の良い事と悪い事の順番をどうするか」そして、永留さんが、「いろいろな意見を生かして、もう一度悪いところや分かりにくいところなど、今日中に書いてください。」と言った。ぼくは、え～～～～～～～～～っと思った。先生に「宿題、それだけにして。」と言うと、OKしてくれた。ゆうずうがきくのです。

それで、その日の夜、ぼくはがんばって、できるだけしぼって書いた。このしぼる作業がつらかった。この時じゃなく、テーマを決める時が捨てきれないのばかりだから苦しかった。でも今思うと、「捨てないと、いいのができないんだなあ」と思った。（中略）

遅くなってもいいから、とにかくこだわった。音楽の始めとか、場所の入れ替わりとか、音楽とナレーションのバランスなど、とにかく時間をかけた。でも、やっているうちに、みんな完成していく…。やはり、あせった。

そして、やっと、やっと、やっと、もう一個つけとこう、やっと、完成した。とても疲れがとれたというか、ほっとした。すごくうれしかった。完成して、すぐ公文に行かないといけなかったけど、自分の作品をみた。いい作品になった。

発表の日、ぼくの番がきた。タイトルなどを言うのにどう言ったらいいか分からなかった。けっこうの人が来てくれていた。うれしかった。

みんな個性が出ていた。Sのあの音楽といい、コイといい、Sが食いしんぼうで明るい元気というのがよく表れていた。T君のは、ゆずジャムのことを説明文みたいに、うまく宣伝していた。KのはKの優しさ、Kの気持ちがよく伝わった。Kのムービーを見てぼくは、Kはみんなのいいところを正直に言えて、すごいと思った。こんなKを初めて知った。悠太っちのは、止々呂美の「一番」は「コイ」というのは思いもしなかった。かくれざるコイが好きだというので、ぼくもそのコイを見てみたい。止々呂美にいるということを初めて知った。山下先生のは、「飛行機の下で…」というのがよかった。文の書き方がいいのかなあ。ぼくらの修学旅行のことなど、止々呂美のことを作ってくれてありがとう。でも、やはり先生になったわけを詳しく知りたい。柴田先生のは、泣きそうだった。小松崎さんは泣いていた。でも、はげまされたというか…。そして、発表が終わり、みんなに感想を聞くと、シ～ンとしていた。あまりにも感動して、言葉が出せなかったのかな（笑）。

プロシードの方々、いろいろ教えてくれてありがとう。教えてくれたことは、コンピュータをたよりにしないことと、この作文に書いたところを深く教えてくれた。ありがとう。長くなったけど、ぼくは、それ以上に思ったことなどあるからね。また会いましょう。

5人の子どもたちのストーリームービーの概要紹介

5年生S……自宅で飼っているグッピーと鯉について表した。お父さんといっしょに余野川に鯉を釣りに行った楽しそうな様子が出ている。

5年生T……止々呂美特産のゆずのジャム作りに徹底的に焦点をしぼったもの。おじいちゃんがゆずを作っているから、このテーマにしたという。

5年生K……本校何十年ぶりの転入生、3年生のMくんについて表した。Mくんに対するやさしい心遣いや止々呂美の仲間が増えた喜びなどを素直に表現した。

6年生R……止々呂美の子どもの人数が少ないことで、良かったなと思うことと、つらいなと思ったことを自分の経験から表した。

6年生Y……止々呂美の自然をやさしいまなざしで見つめたもの。もみじの赤い色が好きと素直に言える感性がすばらしい。

子どもたちの作品は、止々呂美小学校のホームページ（http://www.city.minoh.osaka.jp/todoromi-ele/）でご覧になれます。

なべちゃんのおサルでもわかる『人権教育基本方針』

3. 学力は人権だ！

第2章第2節2項　「子どもの多様性に対応する学力・進路保障の取り組みを進めます」

最近新聞やテレビでも「学力が下がっている」ということが話題になります。実は私はその研究が専門なので、他人事ではありません。では学力は本当に下がっているのでしょうか？

実は、子どもが塾に通えるなど、経済的に安定しているご家庭のお子さんの学力は下がっていませんが、子どもを塾に通わせる余裕のないご家庭のお子さんの学力は下がっています。この10年の間に学力の格差が開いているのが実態です。ですからお子さんを塾に通わせるなどして、教育に投資されているご家庭では心配は無用です。むしろ学校では10年前のカリキュラムとくらべて問題解決のために頭を使う授業をたくさんやっていますから、昔より「やわらか頭」に子どもたちは育っているでしょう。

いま子育てに多少アップアップだなと思われているご家庭では、次のことに用心して下さい。

①お子さんは前の日に学校へ行く準備をしていますか？今子どもたちの中に、がんばって勉強したってどうせ将来ろくな仕事はないし……という無気力が広がっています。一生懸命働いてきた親たちがリストラされる時代です。子どもたちはそれを敏感に感じ取って、夢を失いつつあります。「君が大人になるまでに、お父ちゃんが世の中をなんとかしといてやる。だから今、きみは勉強をがんばれ！学校でしっかりやってこい！」などとはげましてあげて下さい。

②塾へ行っていない場合、図書館で本を借りたり、本屋さんで本を買い与えたり、家で勉強するための問題集を買ってあげて下さい。子どもたちが家で勉強する時間が減っています。その時間はテレビを見たり、ゲームをしたり、携帯で友だちとだべっていることに流れています。テレビやテレビゲームはなるべくなら与えない方がよいでしょう。また携帯電話は犯罪に巻き込まれる可能性のある非常に危険なものです。こうしたものを与えないように、家庭どうしでも連携をとって下さい。

③「勉強でわからないところは私に聞いて」と言ってあげて下さい。それでもわからないことは、先生に手紙を書いてあげて下さい。そうすればお子さんも先生に聞きやすいでしょう。いま「わからないことはほっておく」と答えることもが増えています。あきらめない子どもを育てて下さい。

長引く不況で、親もたいへんです。もう何もかもなげてしまいたくなるのは親の方かもしれませんね。そんなあなたの気分が、子どもにもうつってしまいます。こうして貧しい者が不況にやられていく社会というのは、なんて悲しい社会でしょうか。

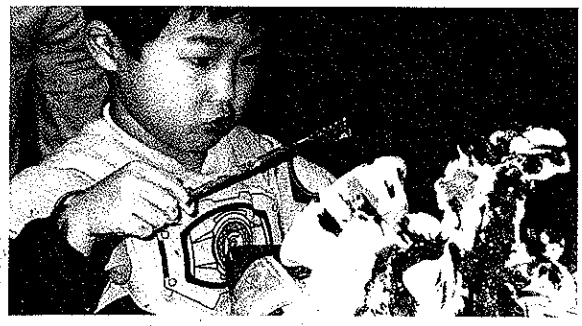
箕面の学校は、そんなことを許しません。いま多くのご家庭が直面している生活のしんどさを理解して、子どもたちがそれにへこたれないようにサポートします。子どもの多様性に対応する学力・進路保障の取り組みとは、そういうことです。学校と家庭がスクラムを組んで、子どもたちの未来を切り拓きましょう。（鍋島祥郎なべしまよしろう 大阪市立大学人権問題研究センター助教授）

人権教育推進会議情報誌『はじける　こころ』
発行　箕面市人権教育推進会議
箕面市教育委員会
教育企画課　TEL072-724-6762 FAX072-724-6010
e-mail:edukikaku@maple.city.minoh.osaka.jp
平成15年（2003年）3月

人権教育推進会議委員
鍋島祥郎、服部ひとみ、埋橋淑子、河野秀忠、丸岡康一、永田よう子、福島全子、松野ひろみ、左英順、屋代直巳、田中はるみ、柳井律子、林宏海、山田佳彦、寺元耕二、上田博、鶴丸春吉、仲野公、藤原秀子、上西利之、井上隆志、前田健、若生耕造、南橋正博、南悦司、津田善寿、黒田正記、前田功、辻広志、浅井晃夫、谷口あや子、太田克己、坂上潔司

げんげのページ

げんげの：「げんげ（紫雪草）」とは、れんげ草のことで、「げんげの」は、れんげ草が一面に生い茂る野原のことです。れんげ草は、茎が地に臥して広がり、春になると蓮の花に似た小花を一面に咲かせます。また、れんげ草は、緑肥として大地を肥やします。蓮に似た小さなれんげ草を、子ども一人ひとりの尊厳に見立てて、それが一面に花開く様子をイメージしました。



写真募集！
子どもたちの笑顔、真剣な顔、輝く顔…などの写真をお送りください。